

日本の近現代建築の保存活動における市民参加に関する研究
－1970 年代の保存に関する言説と事例を通じて－
Studies on the citizen participation in conservation activities of modern architecture
-Through discourses and case examples on conservation in the 1970's-

○梅野航平¹, 田所辰之助²

*Kohei Umeno¹, Shinnosuke Tadokoro²

Abstract: In contemporary Japan, cooperation of citizens is indispensable for conservation activities of modern architectures. Because people engaged in conservation have different values depending on their position. Citizens can convey the value of architectures that architects can not tell. However since when did these citizens participate in conservation activities. In modern times, there are many conservation activities by citizens, but it is not clear what kind of circumstances they came to participate. Therefore, this research clarifies the pattern of citizen entry and its effect in past conservation activities.

0. 研究背景

現代日本において建築物を保存するにあたって、近代建築物への関心は未だ低く、保存と解体の一進一退を繰り返しているのが現状である。そうした近代建築物を保存するうえで生じる主な問題点として以下の三点が挙げられる。

- ① 保存問題はその時代、対象建築物、環境、政治、経済などの内外的要因によって様々であり、一元的に解決するものではないこと。
- ② 文化財登録制度などの現行の制度を用いて、補助金の交付などといった支援制度の確立とその利用が必要不可欠であること。
- ③ 一般の人々の建築に対する関心、価値観を共有し、共感を獲得することで保存活動の一端を担ってもらふ必要があること。

以上の三点はこれまでの多くの保存事例において共通した問題点であり、今回はこの③に着目する。

1. 研究目的

現代日本における近代建築物の保存活動において市民の協力は必要不可欠なものとなっている。なぜならば、保存に関わる人間は、それぞれの立場によって異なる価値観を持っており、建築学的知識を持つ専門家の訴えが通じるとは限らないのである。そうした際に、建築物に対して記憶や愛着といった精神的価値を持つ市民と協力することで、建築家では伝えることのできない建築物の価値を伝えることが出来る。しかし、そうした市民はいつから保存活動に参加していたのか。現代においては、市民主導の保存活動事例は数多くあるが、どのような経緯で市民が活動に参加するようになったのかは明らかではない。よって本研究の目的は、これまでの保存活動における市民参加の模様とその影響を明らかにする。

2. 既往研究

保存に関する論文において、市民の重要性を説明している専門家は数多くいるが、そうした市民の動きを把握している記録は、市民主導の保存活動事例ばかりである。第一に、保存活動そのものに関する研究が存在しておらず、市民は度外視で、それぞれの保存論の展開または対象建築物の調査分析の研究が多いのが現状である。そのため、保存に関する記録などを総括

した既往研究として清水重敦による『建築保存概念の生成史』^[1]が挙げられる。この論文の研究対象は近世から近代にかけてであり、近代以降にはあまり触れられてはいない。またあくまでも、建築専門家による保存概念であり、建築物を扱う一般の人々を含めた視点から、保存の文脈を読み解く必要があるのではないだろうか。

3. 研究方法

『新建築』、『建築雑誌』、『日経アーキテクチュア』の3誌より“保存”に関する記事を抽出し、「社会的背景」、「保存に関する思想と言説」、「保存運動及び事例」の三つのカテゴリーに分類する。対象年代としては、国内外に大きな影響を与えた帝国ホテル問題の1968年から近代建築保存が活発化したと思われる70年代までを対象とする。抽出した情報を時系列に即して今一度整理し体系化させる。そして、それらを読み解き、当時の社会背景、思想と言説そして事例から市民の動きとその影響を分析する。

4. 日本における近現代建築の保存活動の変遷

4-1. 1968年までの諸問題

戦後復興を経て、日本は高度経済成長期を迎えたが、それに伴いいくつかの問題をかかえることとなった。一つが水俣病など四大公害病として騒がれた公害問題である。工場などから排出される汚染物質によって環境が破壊されたことが日本中に知れ渡った。次に1966年に、東京海上火災ビルの超高層建築の申請から起こった“美観論争”が挙げられる、およそ4年にわたって問い沙汰されたこの問題は世間に、都市における景観問題を印象づけた。そして“美観論争”同様に話題となったのが“帝国ホテル問題”である。F・L・ライトによって設計された帝国ホテルは国内外からも大きく注目され、保存活動は当時最大の規模となり、人々に近代建築の保存を強く認識されるきっかけとなった。

4-2. 開発と保存の対立関係

1968年を契機として起こった環境問題、景観問題、保存問題は市民の頭の片隅に根付いた。1968年以降、明治洋風建築の再評価が行われ、町にひっそりと佇んでいた歴史的建造物が日の目を見ることとなった。開発と保存に摩擦が生まれ始めた。しかし、1971年

のドル・ショック, 1973 年のオイルショックによって, 日本は物不足に狂乱物価と経済病理を抱えた。経済問題は保存においても大きな障害であり, この時期を皮切りに, 建築家や建築史家の間では保存が強く求められるようになり, また近代建築に限らず, 伝統的町並みの再開発, 保存運動の機運が高まった。

4-3. 保存手法の新たな可能性

そうした社会背景を受けて, 保存活動もまた変化が求められた。1973 年 12 月号の『建築雑誌』にて「保存の現実と課題 (金沢)」の論稿において, 市民的活動について述べられており, その重要性について触れられている。また 1975 年の『新建築』にて長谷川堯は市民的保存運動を, 1977 年の『日経アーキテクチャ』にて黒川紀章は市民レベルの保存が必要であると述べている。そうした際の保存手法として, 何が何でも原状保存を要求するのではなく, 何を残したいのか, 従来にはない柔軟な発想の必要性を両氏は述べている。

5. まとめ

これらの経緯をうけて, 小樽運河の保存運動はより活発化し保存へ前進し, 東京駅の保存運動に代表

されるように市民による保存活動団体もしくは, 支援団体が増加したことが分かった。

確かに建築物の保存はその時々状況によって大きく異なり, 決して一概に解決策, 保存策が見出されるわけでは無い。しかしながら, 様々な問題に囲まれた中で, その多様な変化に挑戦することで, 保存分野に新たな道を作るのではないだろうか。そして, そこに市民の存在は欠かせないように思う。

【参考文献】

- [1]. 清水重敦, 『建築保存概念の生成史』, 中央公論美術出版, 2013 年 [2]. リム・テヒ, 「1960 年代から 1970 年代にかけて近代建築の保存概念の形成に関する研究」, 学術講演梗概集, pp419-420, 2005 年 [3]. 鈴木博之, 『現代の建築保存論』, 王国社, 2001 年 [4]. 鈴木博之, 五十嵐太郎, 横手義洋著, 『近代建築史』, 2008 年 [5]. 長谷川堯, 「各時代のものが点在する町並みの姿こそ正常」, 日経アーキテクチャ, p37, 1977 年 7 月 [6]. 黒川紀章, 「硬直的な保存論には疑問 も財団作りなど具体策必要」, 日経アーキテクチャ, p41, 1977 年 8 月 [7]. 山口健次, 「保存の現実と課題 (金沢)」, 建築雑誌, pp1319-1320, 1973 年 12 月

Table1. Timeline of conservation activities in the 1970's

	保存活動		
	社会的背景	保存に関する思想と言説	保存運動及び事例
1968	66. 京都保存法施行 66. 東京海上火災株式会社による超高層建築申請に伴う美観論争 67. 金沢市の伝統環境条例施行 68. 森が関ビル竣工 68. 公害問題 68.06. 文化庁設置	68.01. 「建築明治100年」, 村松貞次郎, 『新建築』	68. 三菱一号館解体 68.06. 「帝国ホテルを守る会」運動の総括, 「帝国ホテルを守る会」幹事会, 『新建築』
1969		69.10. 「ミースの死と近代建築の遺産」, 武基雄, 『新建築』 69.12. 「シンポジウム: 都市再開発の問題点」, 丹下健三他, 『新建築』	
1970	70. 美観論争終結 70. 大阪万国博覧会開催 70.01. 全国明治洋風建築リストが発表 70.09. 京都・奈良伝統文化保存シンポジウム開催	70.08. 「保存と意匠」, 菊竹清訓, 『建築雑誌』 70.10. 「保存論の新段階」, 石井昭, 『建築雑誌』 70.10. 「都市計画と景観保存」, 中山晋, 『建築雑誌』 70.10. 「文化財保護の現状と将来」, 日名子元雄, 『建築雑誌』	
1971	71.02. 盛岡市自然環境及び歴史的環境保全条例が制定 71.08. ドルショック		
1972	72. ユネスコにて世界遺産条約が採択		
1973	73. オイルショック	73.01. 「違反一生きる建築への布石として」, 磯崎新, 村松貞次郎, 『新建築』 73.01. 「歴史的風土の保存」, 太田博太郎, 『建築雑誌』	
1974	74. 日本建築学会『日本近代建築総覧』刊行 74.12. 建築学会「大正・昭和戦前建築小委員会」, 設置	73.12. 「集落・街並みの価値と保存」, 稲垣栄三, 『建築雑誌』 73.12. 「歴史的景観と都市の計画」, 大谷幸夫, 『建築雑誌』 74.01. 「村野藤吾先生に乞く 建築的遺産の継承」, 編集部, 『建築雑誌』 74.05-08. 「歴史的空間の現在(4)連載」, 長谷川堯, 『新建築』 74.11. 「アネキニ憲章」, 川添登, 『建築雑誌』 74.11. 「チームXとその周辺」, アリソン・スミソン, 菊竹清訓, 『建築雑誌』	73.12. 「高山市の住民の手による町並保存」, 亀山喜一, 『建築雑誌』 73.12. 「保存の現実と課題(金沢)」, 山口健次, 『建築雑誌』 74.05. 中之島東部の景観と歴史的建造物の保全に関する要望書, 『建築雑誌』 74.05. 日本銀行大阪支店本館の保存に関する要望書, 『建築雑誌』
1975	75. 伝統的建造物群保存地区制度施行	75.01. 「人生は常に正しく, 建築家は常に間違える」, 前川国男, 村松貞次郎, 『新建築』 75.01. 「景観の構造について—近代建築の遺産は重層する」, 藤森照信, 『建築雑誌』 75.04-12. 「歴史的空間の現在(5-11)連載」, 長谷川堯, 『新建築』	
1976		76.05. 「保存問題の発生と両端」, 木村俊彦, 『建築雑誌』 76.05. 「共存の思想と技法」, 黒川紀章, 『建築雑誌』 76.07. 「人を衝つ建築」, 村松貞次郎, 『日経アーキテクチャ』	76.05. 明治洋風建築で今後の保存利用法が決定している建物, 『建築雑誌』 76.07. 夙川駅前再開発訴訟, 『日経アーキテクチャ』 76.08. 「あおに」解らぬ建築家景観論争は命の問題だ, 編集部, 『日経アーキテクチャ』
1977		77.04. 「理不尽の"ひとつ火"」, 村松貞次郎, 『日経アーキテクチャ』 77.08. 「"コマモトとその現状" 理事会に出席して」, 小林文次, 『建築雑誌』 77.10. 「保存についてちがちが考えよう」, 長谷川堯, 『新建築』	77.06. 「景観保存か開発か」の相克を乗り切った学校建設, 鎌原正昭, 『日経アーキテクチャ』 77.07. 「保存行政に新局面開く? 盛岡市独自の条例の波紋」, 村上正昭, 『日経アーキテクチャ』 77.08. 「東京駅"赤レンガ"が物語る栄光と悲劇」, 久留宮金一他, 『日経アーキテクチャ』 77.08. 「日劇ビル」, 田辺昭次, 『日経アーキテクチャ』 77.09. 「特集 東京駅を考えよう!」, 新建築編集部, 『新建築』 77.10. 「長崎の洋館を例として保存人間の営み組み込む」, 大隈哲, 『日経アーキテクチャ』 78.03. 「同潤会・江戸川アパート」, 鎌原正昭, 『日経アーキテクチャ』 78.04. 「東京都第一庁舎」, 村上正昭, 『日経アーキテクチャ』 78.05. 「中京郵便局」"明治"をよみがえらす苦心の手の内」, 浅井雅治, 『日経アーキテクチャ』 78.07. 「武庫川学院甲子園会館(旧甲子園ホテル)」, 編集部, 『日経アーキテクチャ』 78.11. 「東京証券取引所」, 編集部, 『日経アーキテクチャ』 78.12. 「日本基督教協会札幌北一条教会」, 編集部, 『日経アーキテクチャ』 79.04. 「日本初の梅鉢式幼稚園舎 岡山で保存が決定」, 編集部, 『日経アーキテクチャ』 79.06. 「'3代'の歴史を一体化した日本火災海上本社ビル」, 編集部, 『日経アーキテクチャ』 79.09. 「新橋演舞場」, 編集部, 『日経アーキテクチャ』 79.10. 「横浜市開港記念会館」, 編集部, 『日経アーキテクチャ』
1978		78.03. 「"いたび"一住みこなせる都市再生へ」, 編集部, 『日経アーキテクチャ』	
1979		79.05. 「心象に写す—近代建築保存の原点—」, 村松貞次郎, 『新建築』 79.11. 「近代日本における建築家の総合思考」, 柳敷貞次郎, 『建築雑誌』	
1980		80.02. 「グローバルな視野を求め—日本の建築文化と伝統—」, 藤島亥治郎, 『新建築』 80.02. 「日本近代建築調査—その経過・成果・展望—」, 村松貞次郎, 『建築雑誌』 80.02. 「空白地帯における建築保存」, 松葉一清, 『建築雑誌』	79.11. 「町並み保存核に"まちづくり"へ内子町愛媛県」, 岡崎昌之, 『日経アーキテクチャ』 80.02. 「小樽運河, 7年越し論争の軌跡と余韻」, 編集部, 『日経アーキテクチャ』 80.03. 「町並保存への冒険が生きたリサイクル先取りのモデル」, 編集部, 『日経アーキテクチャ』 80.09. 「山の上ホテル本館改修」, 編集部, 『新建築』 80.09. 「山の上ホテル」全面改修躯体を再利用, 新制度導入」, 編集部, 『日経アーキテクチャ』